

Tone and across the Chinese Dialects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000271

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中国語の声調とアクセント

岩 田 礼*

Tone and Accent across the Chinese Dialects

Ray IWATA*

SUMMARY: The monosyllabic lexical tone in Chinese is a composite of the two prosodic components that interact with each other as constraints. "Tonal features" specifically refer to the features associated with pitch, including register and contour, while the "non-tonal features" refer to those related to phonation types, including consonant types, vowel quality and syllable duration.

The stress effect on the tonal features in polysyllabic words is studied. In the dialects attested, two stress patterns are coexistent: right stressed pattern and left stressed pattern. Stress reduction could result in the neutralization of tonal features, which varies in manner and degree across the dialects. Four types of neutralization are observed in the dialects: (α) Context dependent, local type, (β) Context dependent, systematic type, (γ) Context free, partial type and (δ) Context free, complete type. Type (δ) is the case of the so called "neutral tone", which forms a "word tone" in combination with the tone in the stressed syllable. An ultimate consequence of tonal neutralization is monotonalization, which nowadays is going on in the new types of the Wu dialects, such as those in Shanghai and in Hangzhou. An interesting finding is that a sort of accentual system emerges in the process of monotonalization.

Some related topics are discussed together with the historical background of the development of word tones in northern dialects.

キーワード：中国語方言，語アクセント，中和，軽声，語声調，単調化

1. 単音節声調

中国語は典型的な声調方言として知られる。例えば同じ [ma] が、北京方言で高平調に発音されると“母 (ハハ)”の意味、上昇調なら“麻 (アサ)”の意味というように、音節イントネーションが子音や母音と同じように語や形態素の弁別に用いられている。

声調に文イントネーションが重なっても、声調の本質は変わらない。趙元任の喩えに従えば、文イントネーションは“大波”，声調は“小波”（さざなみ）であり、実際の発話で実現されるイントネーションは基本的には両者の算術的総和である（“tonal addition”）。この場合、小波は大波に飲み込まれてしま

うわけではない。例えば、上昇の文イントネーションが要求される位置に現れる下降調（北京語なら第4声）は、下降幅が圧縮されるだけで上昇調に転ずるのではない（以上、Chao, 1933, 1968 参照）。

声調という小波は、ピッチ (F0) に関する特性 (register 及び contour) とそれに連動する韻律的諸特性によって構成されている。小稿では、前者を“声調特性”，後者を“非声調特性”と呼ぶ。両者の関係は密接不可分であり、非声調特性は声調特性実現のための枠組を形成し、制約を及ぼしているといつてよい。

音節レベルでの非声調特性には、①頭子音の清濁、②母音の長短、音質がある。いずれも本質的には音節固有の韻律的特性とみるべきである。①は phonation type の違い — normal/breathy — とみる考え方が有力である。所謂“濁音”は語中では有声だ

* 愛知県立大学外国語学部教授 (Professor, Faculty of Foreign Studies, Aichi Prefectural University)

が、語頭でほとんど無声化しているからである(石, 1983; Iwata et al., 1991)。声調特性が非声調特性の制約を最も強く受けているのは、呉語と呼ばれる方言群(江蘇省南部及び浙江省のほぼ全域に分布)である。

例として浙江省・慈溪県方言を挙げる(慈溪県志, 1992)。声調調値は、声の高さを1, 2, 3, 4, 5の数字で示し(1が最低, 5が最高), 二つ又は三つの数字の組み合わせによって高さの変動を示す。但し音節長が短い場合は, [4]のように一つの数字で表すか, 又は[24]のように下線によって示す。

Long A [445] Long B [223]

Short A [5] Short B [2]

この方言には、音声的に4つの声調がある。うち“Short”(“入声”と呼ばれている)は、母音の短促性の影響で“Long”の上昇部分が実現されない異音とみることができる。またAとBは、それぞれ頭子音に無声音(normal phonation), 有声音(breathy phonation)を有する音節にしか現れず, Bは有声子音の影響で調値が下降したAの異音とみることができる。因って音韻論的には1声調体系である。

呉語では上記①と②の非声調特性が安定している。一方、声調特性の方は、呉語の中でも北部方言群(以下“北部呉語”)でかなり激しい変化(調類間の合流)が進行中で、慈溪方言はそれが行きつくところまで行った例である(下文参照)。呉語は一般に音声的な声調数が多く、12声調という方言もあるが、音韻論的な声調数はかなり少ない。

呉語の南に分布する閩語、客家語、粵語等の方言群では、有声子音の無声化によって、①に関する制約が失われている。しかし②に関する制約は呉語よりさらに強い。それは呉語などでみられる入声と音節長に関する相補性が、音節末 coda に関する相補性によって補強されているためである。例(客家語・梅県方言など)：

“八” [pat] 短音節&入声

“班” [pan] 長音節&非入声

入声は -p, -t, -k としか共起せず, 非入声は -m, -n, -ŋ 及びゼロ(即ち開音節)としか共起しない。一方、これらの方言では、声調特性が音韻的区別をしっかりと保っている。

りと保っている。

北京など、官話方言(主に長江以北に分布)では、①②いずれの制約も失われた方言が多い。いうまでもなく非声調特性の制約を受ける度合いが少ないほど、声調特性の可変性は低くなり、音声的な声調数と音韻論的な声調数が一致する度合いが高くなる。

以上のように、声調に関わる韻律的諸特性が一つの音節の中に“詰めこまれた”状態になっており、音節の外側に解放されることがない¹⁾。ところがここで、声調特性を音節外に解放することを可能にする要素が現れた。語アクセントである。その共時的機能は、一定数の音節を一つの音声単位(phonetic word)に“統合”すること。しかし歴史的には、一音節内の情報過剰を解消するために語アクセントが生まれたのかもしれない。音声外的な背景(動機)としては、複音節語の発展と接尾辞、接頭辞等の形成による“文法化”の進行がある。但し語アクセントの発展にはかなりの地域差があり、粵、客家地域の一部の方言では、それがほとんど発達することなく、依然として“教科書的な”声調言語の姿をとどめている。

2. 中国語の語アクセント

中国語の語アクセントは、音韻論的にはストレスアクセントであるが、音声的にはピッチ、長さ及び母音・子音の音質の差異として表現される。英語のストレスアクセントが、長さだけでなく、声の高さにも影響が及ぶのと同じことで、非声調特性ばかりでなく、声調特性にも影響が及ぶ。ストレスの置かれた音節(stressed syllable)を“S音節”, ストレスを欠く音節(unstressed syllable)を“U音節”と呼ぶ。

S音節が現れる環境は、主に次の三通りがある。“#”は語境界(word boundary), “...U”, “U...”は任意の数のU音節を示す。但し一つの音声単位に含まれる音節数は、多くの場合2又は3で、5以上は稀である。

1) #S#

2) #...US# “Right Stressed Pattern”(RSP)

3) #SU...# “Left Stressed Pattern”(LSP)

1)は“単字調”(citation form)と呼ばれる音節イントネーションが実現される環境で、小稿はこれを“基本形”とみなす。但し必ずしも音韻論的な“基底形”ではない。なにが“基底形”かは、各方言について議論されるべきで、ここでの課題ではない。

2), 3)はストレスが語末、語頭に置かれるタイプであり、それぞれ“RSP”, “LSP”と呼ぶ。多くの方言ではこの二型が並存している。

RSP, LSPのいずれをとるかは、語彙ごとに記録されねばならない(いずれも可という語もある)。またRSP, LSPの所属語彙には、方言間でかなりの不一致がみられる。概略的に言えば、RSPをとる語はより複合語的、LSPをとる語はより単語的である。例えば北京では、“飛機”(飛行機)、“結婚”がRSP、“豆腐”がLSP。また“椅子”や“饅頭”のように接尾辞をとる語はLSPである。従って、RSPは複合語のアクセント規則として捉えてもよい。二音節語ならS+S→U+S。北京などの官話方言では、LSPが語彙の口語性のバロメーターでもあり、辞書上の頻度(lexical frequency)は低い、使用頻度(textual frequency)は高い。北部呉語では、いずれの型をとるかが、語構成法によって一定程度定まる(下文第4章参照)。但し頻度は、いかなる意味においてもLSPが高い。一方、同じ呉語でも、南部呉語(次章温州方言参照)になるとRSPの頻度が高くなり、その南の閩語も含めてLSPの頻度はずっと下がるようである。

RSP, LSPにおけるS音節は、1)で実現されるのと同じ声調特性を示すことが多い。但し“#”の影響やU音節との関係などによって、姿を変えることがある。一方、U音節の声調特性は減衰するが、その程度はRSPよりLSPにおいてより顕著である。韻律特性の減衰が語末で著しいのは、言語の普遍性の顕現である。

一般に“Tone Sandhi”(“変調”)と呼ばれるのは、1)で実現される音節イントネーションが、2), 3)の環境で変容を受けること。S音節かU音節かは問われない。但しLSPにおけるU音節は声調特性を失うことが多く、“Tone Sandhi”とは呼ばず、“軽声”(Light Tone; Neutral Tone)と呼ばれている。“軽声”

という時、同時に含蓄されるのは、音節長、母音の音質等、非声調特性の減衰である。ところが後述のように、U音節の特徴が、声調特性/非声調特性で連動しない場合がある。また軽声は、LSPばかりでなく、RSPのU音節に現れることもある(前部軽声)。

まず以って“Tone Sandhi”の研究と“軽声”の研究は統合される必要がある。次に作業上の手順として、声調特性と非声調特性はひとまず分離して考察すべきである。小稿では、声調特性に限定して、語アクセントの影響を概観する。以下、RSP, LSPにおける声調特性を謂う時、それぞれRS, LSと表記する。

3. U音節における“中和”の類型

U音節における声調特性の減衰は、声調の音韻的対立の中和をもたらす。中和には主に次の形態がある。

- (α) 文脈依存・局所型
- (β) 文脈依存・体系型
- (γ) 文脈自由・部分型
- (δ) 文脈自由・完全型

語末における声調特性の減衰傾向を反映して、中和はLSPにおいてより顕著である。LSPではδタイプ、RSPではαタイプの頻度がそれぞれ高く、他は相対的に少ない。

以下、各類型について実例を挙げながら説明する。うちδタイプはいくつかの下位類型を含むので、次章で論ずる。調類は歴史音韻論の枠組に従って、平声、上声、去声、入声を、それぞれI, II, III, IVで代表させる。陰声と陽声が区別される場合は、陰声のa、陽声のbを組み合わせて、Ia, Ibなどと表示する。例えば北京語の四声なら、1声、2声、3声、4声を、それぞれIa, Ib, II, IIIと表示する。

(α) 文脈依存・局所型

通常報告されるのはRSのみで、このタイプのLSは存在しないかに見える。但し再検討が必要であろう。RSは長江以北の官話方言に頻出する。

次のような声調交替の結果、/A/と/B/の音韻対立が、/C/が後続する場合に限って中和され、/B/で実現される：

A → B / _____ C

/A/と/C/はしばしば同声調である。例えば北京語で声調IIが連続する場合：

II [214] → Ib [35] / _____ II [214]

米酒 [mi tsiou]

{II + II} [214+214] → /Ib + II/ [35+214]

αタイプでは、U音節の減衰が最小レベルであり、U音節がさらにその前のU音節に影響を与えることができる。例えば、次の例のストレスパターンは#UUS#だが、最初のUは二番目のUの影響を受ける：

両本 | 書 [liɑŋ pən ʂu] (2冊の本)

{II + II + Ia} [214+214+55] →

/Ib + II + Ia/ [35+21+214]

これと、例えば“我 | 買書”[uo mai ʂu] {II + II + Ia} (私は本を買う)は、句構造が違うが、音声レベルで一単位を形成する限り出力は同じである。また下記βタイプとは異なり、3, 4音節語の語頭で声調特性が弱まることはない。なお上の/II + Ia/で声調IIが[21]で実現されるのは、II以外の声調が後続する場合に現れる声調II[214]の条件変異であり、声調交替とはみなさない。

さて北京語の声調IIの場合、[214]が[35]になるのは、低曲折調の連続が異化を起こしたためと説明できる。ところが声調IIの連続に関するこの声調交替は、北京のみならず長江以北の官話方言地域でかなり広範にみられる(Shi, 1999)。その際、声調IIは北京語のような低曲折調とは限らない：

II [55] → Ib [51] / _____ II [55] (山東省・済南、
德州、済寧)

II [24] → Ib [51] / _____ II [24] (江蘇省・贛榆)

II [13] → Ib [45] / _____ II [13] (天津)

これらを一貫した音声学的原理で共時的に説明するのは難しい。それは、{II + II} → /Ib + II/ という形態音韻規則が過去に形成され、多くの官話方言がそれを受け継いできたが、声調調値の方はそれぞれに変化してしまったためである(平山, 1999)²⁾。

但し同声調の連続が異化を起こしやすいことは事実である。天津方言では、異化で説明し得るかにみえる声調交替が、{II+II}の他に二つある(石, 1986)：

Ia [21] → II [13] / _____ Ia [21]

III [53] → Ia [21] / _____ III [53]

αタイプの中和は同声調の連続に限らない。次は天津でみられるもう一つの声調交替である：

III [53] → Ib [45] / _____ Ia [21]

また中和の結果が、いずれの単字調とも異なる場合がある。山東省・德州方言の例(曹, 1991)：

Ia [213] → [23] / _____ III [21]

III [21] → [23] / _____ III [21]

但し音韻論的には、[23]は声調Ia [213]の異音であろう。とすれば、声調交替としては{III+III} → /Ia+III/だけを認めればよい。

(β) 文脈依存・体系型

管見の限りでは、RSしかみられない。南部呉語(温州など)や閩東語(福州など)の地域で現れるが、分布範囲は狭いようである。

U音節において声調の音韻的対立が体系的に失われ、2つ乃至3つの原音素(archi-phoneme)に中和される。この点は下記γタイプと同じ。S音節の直近音節(penultimate syllable; 2音節語では頭位音節)は—αタイプと同様—S音節の制約を受ける。3音節以上になると、S音節から離れるほど文脈の制約が弱くなり、語頭でδタイプのな特徴(完全中和)がみられる。以下、例は浙江省・温州方言(鄭張, 1964による)。但し文脈依存度は福州方言などより低い。

この方言には音声的に8つの声調がある。陰声(a), 陽声(b)の対立を頭子音の清濁に帰せば、音韻論的には4声調体系である：/level/(Ia [44], IIIb [22]), /falling/(IIIa [42], Ib [31]), /high-rising/(IIa [45], IIb [34]), /low-rising/(IVa [323], IVb [212])。この方言では調値の歴史的変化の結果、調類と調素の対応が不完全である(IIIbとIbが入れ替わっている)。S音節は調素を単位とする。

温州方言のRSの特異性は、ストレスパターンが

“左強，右弱”のLSP的傾向を示すことである。そのためS音節では声調特性の減衰がみられ，特に/falling/は軽声的になることが多い。しかし全体として4調素の音韻的区別は保たれている。中和の程度は，ストレスパターンと逆行して，音声単位内の左（前）へ行くほど高くなる。U音節には，“High”と“Low”の二つの原音素が現れる。以下，それぞれ“H”，“L”と表示する。Hは[43][42][4]などで実現され，Lは[22][21][213][34][2]などで実現される。

(i) 語末から2番目の (penultimate) 音節

I, II, III, IVの調類が単位となる。声調I（平声）の場合，“H”，“L”のいずれで実現されるかは，S音節（この場合は調類，調素いずれも可）によって決まる：

声調I → H / _____ high rising or low rising
(声調II, IV)

声調I → L / _____ level or falling (声調I, III)

例（以下，分節音のIPAは略，囲みは原音素）：

資本 {I} +/high rising/ [44+45]

→ \boxed{H} +/high rising/ [43+34]

飛機 {I} +/level/ [44+44]

→ \boxed{L} +/level/ [22+33]

声調II, III, IV（仄声）の場合は，ほぼ“文脈自由”といってもよい。IIとIIIの対立はHに中和され，IVは自動的にLとなる。

下記“補足規則”に対応した音声規則：S音節の/falling/はHに後続する時L化する。H+/falling/は[42+21]（S音節は短弱）になる。

(ii) 語末から3番目 (antepenultimate) 及びそれより前の音節

完全中和（ δ タイプ）に近い状態になる。

主要規則：後ろから3番目にHを入れ，それより前にはLを入れる。

飛機場 {I+I} +/falling/ [44+44+31]

→ \boxed{H} + \boxed{L} +/falling/ [43+22+2]

工作時間 {I+IV+I} +/level/ [44+323+31+44]

→ \boxed{L} + \boxed{H} + \boxed{L} +/level/ [34+43+22+33]

補足規則：後ろ2音節がH+/falling/であれば，Hを語頭に移動させ，残りすべてにLを入れる。

工作路線 {I+IV+III} +/falling/ [31+34+45+42]

→ {I+IV} + \boxed{H} +/falling/

→ \boxed{H} + \boxed{L} + \boxed{L} + \boxed{L} [42+21+31+21]

/falling/は上の“飛機場”（飛行場）でもL化して[2]で実現されるが，この場合直前のLは，Hのようなシフトをみせない。“工作路線”（工作上，政治上の方針）で，後ろから2番目のLがやや高く実現される[31]のは，“工作”と“路線”の語境界が意識されるためである。

原音素—この方言では特にL—は既定値 (default value) 的な性格を有する。LSにおける軽声（下文の“ゼロ調素”）がそうであるように，それは前後の調値に同化することが多い。上の諸例でLは[22]となることが多いが，“工作時間”の語頭のLが[34]になるのは，直後のH[43]の影響である。

(γ) 文脈自由・部分型

RSもLSもあるが，LSは一部の方言にしか現れない。北部呉語の周辺（江淮官話，南部呉語，贛語，湘語のそれぞれ一部）に分布する傾向があるが，広東省・潮陽方言のような閩南語にも同じ類型が現れる。

このタイプでは，中和がS音節の制約を受けない。仮にA, B, C, Dの4種類の声調をもつ方言があったとして，U音節に次のような中和が起きる場合である：

A, B → X ; C, D → Y

X, Yは，A, B, C, Dのいずれかと同じこともあるが，そうでないこともある。いずれにせよ，[55][33][11]などの平板調が多く，非末位での平板化が顕著である。但し β タイプと異なり，RSでS音節から離れるほど（左へ行くほど）中和の程度が高くなることはない。語頭での減衰が少ない点では，むしろ α タイプと似る。

江蘇省・連雲港方言（江淮官話）のRS（岩田，1983-1986）：

萤火虫 {Ib+II+Ib} [24+41+24] (ホタル)

→ \boxed{H} + \boxed{H} +/low rising/ [55+55+24]

深更半夜 {Ia+Ia+III+III} [213+213+45+45]

(深夜)

→ \boxed{L} + \boxed{L} + \boxed{L} +/high rising/ [21+21+21+45]

声調 Ib と II, 声調 Ia と III の対立は, それぞれ中和されて “High” [55], “Low” [21] となる。このことは同一音声単位内の U 音節である限り, 位置を問わず不変である。

連雲港方言や浙江省・武義方言 (南部呉語) などでは, この種の中和が RSP の U 音節だけに起きる (武義については傅, 1984)。一方, 魏 (2000) が挙げる湖南省・婁底方言 (湘語), 江西省・萍郷方言 (贛語) では, RSP, LSP いずれの U 音節にも起きる (調類の表記は省略) :

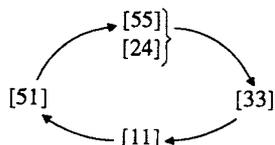
- 萍郷 RS, LS [44] [13] → [4], [35] → [45],
[11] → [1]
婁底 RS [44] [13] [35] → [33],
[42] [11] → [1]
LS [44] [13] → [33], [35] → [5],
[42] [11] → [1]

連雲港や武義とは異なり, RSP では非声調特性 (長さ) も減衰する。声調特性の減衰は, RSP と LSP で平行的である。萍郷では RS と LS で全く同じ。但し中和は [44], [13] だけに生起している。婁底においては, 中和の出力が LS では三種類なのに, RS では二種類である。一般に U 音節の減衰, 声調特性の中和は, RSP より LSP において顕著であり, それが逆転するのは珍しい。一般的傾向に合致するのは, 潮陽方言である (張, 1979-1980) :

- 潮陽 RS [33] [313] [11] → [33], [53] → [31],
[31] → [55], [55] → [11]
LS [33] [313] [11] [31] [55] → [11],
[53] → [31]

RS と LS で等しい減衰がみられるのは, [53] → [31] だけである。LS では他のすべての声調が [11] になる。

潮陽方言の RS でみられる [53] → [31] → [11] のような連鎖的な声調交替は, 閩南語の特徴で, “tone clock” と呼ばれている。厦門方言 (RS) の “tone clock” は有名である :



厦門と比較すれば, 潮陽では [33] [313] [11] → [33] の中和によって “tone clock” が不完全になったことがわかる。但し厦門でも [55] [24] → [33] の中和がみられ, “tone clock” に不完全な所がある (Yue-Hashimoto, 1987)。

歴史的にみれば, より古い形態として “tone clock” タイプ, 即ち A → X が音韻対立の中和を生起しない声調交替があり, それが潮陽のような不完全な “tone clock” を経て, γ タイプの中和に移行するという過程が想定できよう。“tone clock” においては, U 音節の減衰が α タイプと同程度の最小レベルと考えられる。減衰のレベルが高くなるにつれて, 中和がより体系的に生起するようになったのであろう。もっとも, “tone clock” タイプと γ タイプには, 地理的な連続性が認められないようであり, 現在 γ タイプを示す方言がかつて “tone clock” タイプであった保証はない。

4. 完全中和 (δ タイプ) と語声調, 単音調化

δ タイプは所謂 “軽声” の場合である。LS しか現れない方言が多いが (後部軽声), 呉語では RS も現れる (前部軽声)。

A, B, C, D の 4 種類の声調をもつ方言があったとして, U 音節に次のような無条件の完全中和が起きる :

A, B, C, D → X

原音素 X はこの場合 “ゼロ調素” でもある。それは音的に “既定値” を有する。その値には方言差がみられるが, LS では低音域又は中音域 (調形不定), RS では平板調 (音域不定) で実現されることが多い。但し S 音節の影響によって, しばしば音声的实现が異なる。以下, ゼロ調素を /N/ と表記する。

ゼロ調素を含む音声単位の音調は S 音節の声調特性によって一律に定まる。このような音調を “語声調” (word tone) と呼ぶ (早田, 1999)。当該方言に κ 種類の声調対立があれば, 音声単位を構成する音節の数に関わらず, κ 種類の語声調が存在する。これは実質的に日本語方言の所謂 “N 型アクセント” と同じである。以下, まず官話の例, 次に北部呉語の

例を挙げる。

1) 官話

例は連雲港方言。この方言には三種類のLSがあるが、まずそのうちの二つ：

連雲港LS (1)

陰天 {Ia+Ia}[214+214] → /Ia+N/ [214+2] (曇り)

明年 {Ib+Ib}[24+24] → /Ib+N/ [24+2] (来年)

哪裏 {II+II} [41+41] → /II+N/ [55+2] (どこ?)

外面 {III+III}[45+45] → /III+N/ [45+2] (そと)

值得 {IV+IV}[24+24] → /IV+N/ [55+2] (値する)

連雲港LS (2)

鍋巴 {Ia+Ia}[214+214] → /Ia+N/ [214+5] (おこげ)

饅頭 {Ib+Ib}[24+24] → /Ib+N/ [21+5] (マントウ)

椅子 {II+II} [41+41] → /II+N/ [41+1]

這個 {III+III}[45+45] → /III+N/ [44+5] (これ)

活着 {IV+IV}[24+24] → /IV+N/ [21+5]

(生きている)

(1)の語は形態素結合が相対的に緩く(“修飾+被修飾”構造が多い)、(2)の語は結合が緊密である(第二音節に接尾辞又はそれに準ずる形態素をとるものが多い)。ゼロ調素 /N/ は一特に(2)の場合一形態素レベルでその指定を受けるとも考えられる。例えば、“鍋巴”は {Ia+Ia} でなく {Ia+N}。

(1)ではS音節が変調しない、又はRSPのU音節と同調値となる。/N/は一律に低音域の[2]となる。但し音響データによれば、[2]のように末尾に向ってF0がやや下降する。これはこの方言の既定値が顕現したものである。声調特性を構成する“音域”(register)と“調形”(contour)のうち、LSでは音域のみが残るものと考えられる。岩田(1999)ではこれを“声域特性(register feature)”と呼んだ。

(2)では声調IIの後で低音域の[1]、他声調の後では高音域の[5]となる。これはU音節の弱화가激しく、そのためS音節の声調特性の一部が右側にシフトし、U音節がそれを担うことになったものである。例えば、[214+5] ≡ [214]、[45+5] ≡ [45]のように、2音節で1音節相当となる。ここでは既定値まで失われてしまった。このような現象

を“right spreading”と呼ぶ。

LSで連雲港の(1)のように既定値が体系的に残される官話方言は多くない。(2)の“right spreading”タイプは江淮官話や晋語(山西省の一部に分布)などにみられるが、全体としては少数。官話方言の多くは(1)と(2)のミックスである。北京語の例：

金子 {Ia+N} [55+2] (金)

銀子 {Ib+N} [35+2] (銀)

椅子 {II+N} [21+4] ≡ II[214]

扇子 {III+N} [52+2] ≡ III[52]

II+Nが“right spreading”タイプ、Ia+NとIb+Nが既定値保存タイプ、III+Nはいずれの解釈も可能である。但し音響データによれば、Ia+NとIb+Nはそれぞれ[55+41]、[35+51]のように、/N/が下降調であり、第二音節の発端まで“right spreading”が及ぶと解釈することもできる。言語学者が/N/の下降を聞き取れないのは、音節長が短いためである。

2) 北部呉語

例は上海方言(許・湯1988)：

RS

生火 {Ia+IIIa} [53+34] → /N+IIIa/ [44+34]

炒飯 {IIIa+IIIb}[34+23] → /N+IIIb/[44+23]

LS

先生 {Ia+Ia} [53+53] → /Ia+N/ [55+21]

炒飯 {IIIa+IIIb}[34+23] → /IIIa+N/ [33+44]

RSは“生火”「火をおこす」のように、“VO”構造の語に多い。LSは“修飾+被修飾”構造に多い。“炒飯”は、RSで発音されれば“メシを炒める”、LSであれば“チャーハン”の意味になる。但し“メシを炒める”はLSでも発音されるといふ。前述のように、北部呉語ではLSの頻度が高く、VO構造なら自動的にRSとは決まらない。またゼロ調素 /N/ は形態素に指定されるのではない。まず単語レベルで語アクセント(RSP, LSP)が指定され、音韻レベルでU音節の声調特性が/N/になると考えられる。

RSにおける/N/は、上海方言では[44]となる³⁾。他の北部呉語方言でも、音域の差こそあれ平板調

が多いようである。RSの/N/では、声調特性のうちの“調形”のみが残るのかもしれない。但し汪平(1996; 56)は、蘇州方言について短促調[3]と記している。

LSでは“right spreading”が生起する。“先生”では[55+21]≡[53]，“炒飯”(チャーハン)では[33+44]≡[34]となる。“right spreading”のドメインは官話より広いが、三音節以上になると、S音節の声調特性が語末まで及ばず、既定値が現れることが多い。

杭州方言のLS

(秋谷, 1988 による; 入声(IVa, IVb)は省略):

	単音節	2音節	3音節	4音節
Ia	334	33+34	33+34+53	33+34+55+21
Ib	23	22+34	22+34+53	22+34+55+21
IIa	53	55+21	55+22+21	55+22+22+21
IIIa	45	34+53	34+55+21	34+55+22+21
IIIb	113	11+53	11+55+21	11+55+22+21

Ia/Ib, IIIa/IIIbは調形が同じで、a/bは音域の差である。“高調”(高起式)と“低調”(低起式)の区別を認めてもよいが、音韻対立を語頭子音の清濁に帰せば、三種類の語声調(I, II, III)だけを認めればよい。全体を通してみると、まず調値の最高点([5])の後で必ずピッチが下降することがわかる。次に三種の語声調でピッチの下がり目の位置が異なることがわかる。また2音節語のIa, Ibでは下がり目がない。従って、各語声調の違いは、ピッチの下がり目の有無と位置によって記述できる。これを“アクセント特性”と呼ぶ。

I	○○	○○○1	○○○1○
II	○1○	○1○○	○1○○○
III	○○1	○○1○	○○1○○

声調言語がアクセント特性を有するようになったという事実は重要である。これは蘇州など古いタイプの呉語では未発達の特徴であるが、決して杭州方言の特異性ではなく、他の北部呉語方言についても報告されている(Chen, 2000)。しかしだからといって、これらの方言が声調言語からアクセント言語に移行したと言うことはできない。語声調の音調を決めるのは、S音節の声調特性だけ

らである。アクセント特性は、おそらく表層音韻レベルでの弁別特性なのであろう。このことは日本語の“N型アクセント”の本質にとっても示唆的である。即ち、アクセント特性によって記述できる言語は必ずしもアクセント言語ではない。

アクセント特性は、むしろ声調言語が単音調化していく過程における中間段階を示すのではないかと想像している。上海市とその近郊には、上記杭州方言のような体系、b系列が一つだけになった体系、そしてさらに簡略化された体系「a系列二声調(Ia, IIIa), b系列一声調」がある。市内で現在もっとも有力なのは、この最後のタイプだが、a/bの差異を語頭子音の清濁に帰せば、2声調体系であり、その違いはアクセント特性によって記述できる。

I	○1○	○1○○	○1○○○
III	○○	○○1○	○○1○○

ところが現在若い世代では、さらにIIIa>Iaの変化が進行中という(許・湯, 1988; 56)。もしこの変化がさらに進むのならば、その帰結は冒頭で紹介した慈溪方言のような1声調体系である。

5. “重い軽声”

声調の“right spreading”は、U音節における声調特性の極端な減衰によるものと考えられる。ところが、北部呉語では非声調特性がこれと連動して減衰することがない。U音節はS音節よりやや短いというにすぎない(廖, 1988)。共時的には、語アクセントが声調特性のみに影響する、と解釈されるが、通時的にみれば、かつて非声調特性も減衰していた時期があり、のちにそれがS音節の特性を回復したものかもしれない。

官話方言にもこれと似た現象がある。いわば“重い軽声”(同時に“長い軽声”)が、北京を含むいくつかの方言で報告されている(王, 1992)。しかし呉語の“重い軽声”が音調的には既定値([21][22])を示すのに対して、官話のそれは特定の調類の声調特性を獲得した“secondary tone”である(Zavyalova, 1996)。例は連雲港方言の三番目のLS:

連雲港 LS (3)

蒼蠅 {Ia+Ib}[214+24] → /Ia+N/ [214+41] (ハエ)

容易 {Ib+III}[24+45] → /Ib+N/ [21+41]

地方 {III+Ia}[45+214] → /Ia+N/ [44+41] (場所)

月亮 {IV+III}[24+45] → /Ia+N/ [24+41] (月)

この方言では、一部の語のU音節が[41]、即ち声調IIの特性を獲得した(但しII+Nを欠く)。LS(3)で発音される語は、上記LS(2) (“right spreading”タイプ)で発音されることもある。またLS(3)は、LS(2)と調値が似ている(S音節は相同)。従って、通時的には両者の間の派生関係が想定される。

このように、連雲港方言には三種類のLS型語声調が使われており、それぞれが一定数の語彙を負担している。三種類というのは珍しいが、二種類のLSを有する方言なら、山東省などにいくつかある(Giet, 1939; 張, 1990)。山東方言の二種類のLSは、語構成法、所属語彙及び音調において、連雲港のLS(1)、LS(2)とそれぞれ似た特徴を有する。

LSPにおける語声調の発展は、中国語史におけるストレスの左移動(left shift)を反映する(Kratochvil, 1987a)。それは声調発生論(tonogenesis)で想定される音韻法則的な発展(語頭、語末の子音などを条件とする)とは異なり、一語一語、いわば語彙拡散的(lexical diffusion)に生じた。複数タイプの語声調は、歴史的には語群による軽声化の時期の違いを反映しており(平山, 1998)、LS所属語のfunctional loadの増大によって、型を分化させる必要が生じたのであろう(岩田, 1999)。連雲港方言について言えば、ストレスの左移動(left shift)が最も早くに生じたのがLS(1)の語群であり、ついでLS(3)、最後にLS(2)の語群に生じたと考えられる(岩田, 1999)。しかし方言間には必ずしも明確な語彙的対応がみられない。

一般的な音韻変化であれば、例えば官話祖語の段階で連雲港のような三型体系が形成されたのち、二型体系(山東方言)、最後に一型体系(他の官話方言)、という具合に合流が起きたと考えられるはずである。岩田(1999)はそのような前提で議論を進めた。しかしながら音韻条件を欠いた分裂(split)と合流(merger)が、この通りに進んだ保証はない。よ

り蓋然性が高いのは、各地でストレスの左移動が平行的に進んだが、複数タイプの語声調の確立と保存に成功した方言と失敗した方言があった、ということである。連雲港方言のLS三型体系は、アクセント特性によって区別されるので、型の弁別が容易である:(1) /○¹○¹/, (2) /○○¹/({II+N}を除く), (3) /○○¹/。しかしこのような体系を発達させた方言はおそらくごく少数で、一般には語声調の型の違いも調形によって弁別されるしかない。たとえ型の区別が形成されても、混同が生じやすかったのだろう。

〔注〕

- 1) 関連する知見がある。閩語、客家語、粵語の音節末閉鎖音-p, -t, -kは破裂を欠くが、これと音響的性質が全く相同な-p, -t, -kは韓国語にもある。ところが中国語方言と韓国語では、-p, -t, -k発話時の喉頭調節に違いがあり、韓国語では声門が開くが、中国語では声門が閉じている(岩田, 1985)。タイ語の-p, -t, -kは中国語と同じく声門を閉じるタイプである(Iwata et al., 1990)。従って、これは声調言語/非声調言語の違いを反映する特徴と言ってよい。韓国語で声門が開かれるのは、-p, -t, -kが音節の外に向っていることを示す。事実、形態素結合において、これらの音節末閉鎖音が後続音節の頭子音に変身したり(後続が母音始まりの音節の場合; 所謂“liaison”), 後続子音を変質させたりする現象がある。中国語方言やタイ語ではこの種の現象が稀であり、-p, -t, -kが音節内部に留まって外にでることがないことを示す。
- 2) 音響データでは、II+IIのIIのF0がIb+IIのIbより低く出る傾向があり(Kratochvil, 1987bなど)、因って声調IIの交替形は声調Ibと同音ではないという議論がある。しかし北京語で、声調IIの連続に関する形態音韻規則が存在することは、知覚実験の結果からも疑いがなく(Wang & Li, 1967; Peng, 2000)、その場合、話者の中で常に形態素に対する同定意識が働きうることを考慮する必要がある。IIの交替形がIbにどの程度“範疇化”(categorized)されるかは(Peng, 2000)、発話における同定意識に左右されるところがあろう。北京語の声調II, Ibの現在の調値は歴史の産物であり、もし一山東方言のように一IIが高平調でIbが高降調であったならば、誰もhomophonyを疑わなかったかもしれない。
- 3) RS型の中和は、例えば“中華|人民|共和|国”の下線部にも起き、その場合は[33]で実現されるとい

う。この句はS音節“国”によって統合されているが、語境界が意識される箇所で見られる“サブS音節”では、声調特性が一定程度弱まるのであろう。

参考文献

- 秋谷裕幸(1988)「杭州方言の声調」『中国文学研究』No.14, 32-48.
- 曹延傑(1991)『德州方言志』(語文出版).
- Chao, Y-R. (1933) “Tone and Intonation in Chinese” 『中央研究院歷史語言研究所集刊』4, 121-134.
- (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.
- Chen, M. (2000) “From tone to accent” *Cahiers de Linguistique Asie Orientale*, Vol.29-2, 179-203.
- 慈溪縣志(1992) 浙江人民出版社.
- 傅國通(1984)「武義方言的連讀變調」『方言』1984-2, 109-127.
- Giet, F. (1939) *Die Töne des Süd-Shantung Dialekts in Wortverbindungen an Hand von Übersichten, Regeln und Beispielsammlungen Dargestellt*. Beiträge zur Einführung in das Chinesische Studium 4, Taikiachuang.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』(大修館).
- 平山久雄(1992)「從歷時觀點論吳語變調和北京話輕聲的關係」『中國語文』1992-4, 244-252.
- (1998)「從聲調調值演變史的觀點論山東方言的輕聲前變調」『方言』1998-1, 7-13.
- (1999)「官話和晉語方言中“上上變調”的類型及其成因」江藍生・侯精一編『漢語現狀與歷史的研究』(中國社會科學出版社), 217-233.
- 岩田礼(1983-1986)「江蘇省・連雲港方言の音韻体系(I)(II)(III)(IV)」『アジア・アフリカ文法研究』12-15.
- (1985)「南部中国語の音節末閉鎖音」『言語研究』87, 21-39.
- (1999)「論北京方言和連雲港方言的高降輕聲及其歷史含義：兼論吳語廣用式變調的語音特徵」S.Wang et al., eds., *Selected papers from the Fifth International Conference on Chinese Linguistics* (The Crane Press, Taipei), 139-164.
- Iwata, R., H. Hirose, S. Niimi, M. Sawashima & S. Horiguchi (1990) “Syllable final stops in East Asian languages - Southern Chinese, Thai and Korean -” *Proc. ICSLP 1990*, 621-625.
- Iwata, R., H. Hirose, S. Niimi & S. Horiguchi (1991) “Physiological properties of “breathy” phonation in a Chinese dialect - A fiberoptic and electromyographic study on the Suzhou dialect” *Proc. of 12th Int'l Conference on Phonetic Sciences*, Vol.3, 162-165.
- Kratochvil, P. (1987a) “The Case of the Third Tone” *Wang Li memorial volume* (Joint Publishing Co., HK), 253-276.
- 巴維爾(1987b)「北京話正常話語裏的輕聲」『中國語文』1987-5, 330-345.
- 廖榮容(1988)「蘇州話單字和雙字組的音長規律」『吳語論叢』(上海教育出版社), 44-52.
- 林茂燦・顏景助(1980)「北京話輕聲的聲學性質」『方言』1980-3, 166-178.
- Peng, S-H. (2000) “Lexical versus ‘phonological’ representations of Mandarin sandhi tones” M. Broe, & J. Pierrehumbert eds., *Papers in Laboratory Phonology*, V, 152-167.
- 石鋒(1983)「蘇州話濁塞音的聲學特性」『語言研究』4, 49-83.
- (1986)「天津方言雙字組聲調分析」『語言研究』10, 77-90.
- Shi, F. (1999) “A Tone Sandhi in Chinese Northern Dialects” Kaji ed., *Proceedings of the Symposium, Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Typology, and Related Topics* (ILCAA), 109-119.
- 汪平(1996)『蘇州方言語音研究』(華中理工大學出版).
- Wang, W. & K-P. Li (1967) “Tone 3 in Pekinese” *Journal of Speech and Hearing Research*, 10, 629-636.
- 王旭東(1992)「北京話的輕聲去化及其影響」『中國語文』1992-2, 124-128.
- 魏綱強(2000)「調值的輕聲和調類的輕聲」『方言』2000-1, 20-29.
- 許寶華・湯珍珠(1988)『上海市區方言志』(上海教育出版社).
- Yue-Hashimoto, A. (1987) “Tone sandhi across Chinese dialects” *Wang Li memorial volume*, 445-474.
- Zavalyova, O. (1996) *Dialecty Kitajskava Jazyka*. Institute of Far Eastern Studies, RAN, Moscow.
- 張鴻魁(1990)『臨清方言志』(中國展望出版).
- 張盛裕(1979-1980)「潮陽方言的連讀變調」『方言』1979-2, 93-121; 1980-2, 123-136.
- 鄭張尚芳(1964)「溫州方言的連讀變調」『中國語文』1964-2, 106-152.